

令和 2 年 6 月 9 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K01632

研究課題名(和文) 学部と附属学校の連携・協同による保健体育科教育実習指導プログラムの構築

研究課題名(英文) Cooperation between Faculty of Education and Attached School in Teaching Practice in Physical Education

研究代表者

岩田 靖 (IWATA, Yasushi)

信州大学・学術研究院教育学系・教授

研究者番号：60213295

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、教育実習における大学・学部と附属学校の連携の在り方について検討したものである。本研究では、以下に示す事柄が成果として得られた。教育実習での経験を大学に持ち帰り、改めて教科教育法の授業でその課題解決に向けた方略を検討することが有効であること、教育実習での素材選択では、戦術的課題が易しく、学習場面での子どもの変化や向上を読み取りやすいものを選択することが望ましいこと、以上2点である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題では、教育実習における附属学校と大学の連携を「授業内容の連携」と「素材・教材の選択」といった2つの視点からとらえ、その成果について検討することとした。前者では、教育実習と教科教育法の授業における具体的な連携の視点を提案できた。また、後者では、これまで見過ごされてきた球技領域における素材・教材選択の問題について、一定の示唆を得た。これの成果は、今後の教育実習のさらなる充実や、大学・学部と附属学校の連携強化に意義があるものと考えられる。

研究成果の概要(英文)：In this study, we examined the method of cooperation between universities/faculties and affiliated schools in educational practice. The following matters were obtained as results.

It is effective to solve problems at the university based on experience in educational practice. It is better to select teaching material that is easy for tactical problems easy to observe changes and improvement of children.

研究分野：体育科教育学

キーワード：教育実習 教員養成カリキュラム 大学・学部と附属学校の連携 素材・教材選択 実践的指導力

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

中央教育審議会（2006）は、「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」において、「教育実習の改善・充実」について言及する中で、大学教員と実習校指導教員の連携した指導の必要性を強調している。また、「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）」（中央教育審議会、2015）では、附属学校の積極的活用や大学・学部と附属学校の連携強化の必要性が強調されている。大学・学部と附属学校が教育実習における協同的な指導体制を構築していくことは、今後の教員養成における重要な課題として認識できる。

附属学校と大学の連携を考える際には、教育実習期間中や事前・事後指導における両者の連携した指導に加え、教員養成カリキュラムにおける授業内容を教育実習と関連させること、教育実習で実習生が指導を行う素材や教材の選択の問題も重要な側面となるであろう。これらの点についての成果を積極的に検証していく必要があると考える。

2. 研究の目的

そこで本研究課題では、附属学校と大学の連携を「授業内容の関連」と「素材・教材の選択」といった2つの視点からとらえ、その成果について検討することとした。

3. 研究の方法

①教員養成カリキュラムにおける授業内容と教育実習の関連

2019年度「教育実習Ⅰ」において、附属N中学校に配属された3年次生7名を対象として、教育実習で担当した球技領域における素材・教材について、改めて模擬授業という場面でその授業づくりを試みることで、教材解釈やそれに基づく指導の在り方を洗練させていく視点が獲得されることを期待した。

調査対象となった6名に対して、以下に示す自由記述形式によるアンケート調査への回答を求めた。教育実習で指導を経験した単元教材を対象として、改めて模擬授業という場面で授業づくりを臨むことで得られた新たな発見、教育実習で得た成果や課題を再認識したことについて問いかけたものである。なお、「模擬授業①アタック・プレルボール」、「模擬授業②ダブルセット・バレーボール」、「模擬授業③ダブルバウンド・テニス」が終了した12月下旬に調査を実施した。

附属長野中学校 教育実習Ⅰ 受講生へのアンケート
今年度の教育実習Ⅰでは、「球技」領域における修正したゲーム（アタック・プレルボール、ダブルセット・バレーボール、ダブルバウンド・テニス）を単元教材として取り組んでもらいました。その後、改めて模擬授業という場面で同じ教材を用いた授業づくりを臨んでもらいました。このようなプロセスで、新たな発見を得たり、教育実習で得た成果や課題を再認識したりしたことについて、具体的に記述をしてください。
<div style="border: 1px solid black; height: 100px; width: 100%;"></div>

②教育実習で指導する素材・教材の選択

2018年度、それまで教育実習において取り扱ってこなかった「球技」領域の素材を選択し、実習生に授業づくりについて教材づくりから取り組ませるプロセスをとった。その際、中心的な素材として選択した「ゴール型」のバスケットボールの場合、実習生にとっても、そして実習を指導する附属教員にとっても「非常に厳しいものであった」との反省が附属の指導教員と学部の教科教育担当教員の間で共有され、2019年度「教育実習Ⅰ」では、「ゴール型」から「ネット型」へ素材の変更を試みた。

附属 N 中学校に配属された 3 年次生 7 名を対象として、下記に示す自由記述形式によるアンケート調査への回答を求めた。アンケートの内容は、①授業づくりの準備について、②書籍文献・ゲーム映像・ゲームの実体験等について、③指導教員とのコミュニケーションについて、④子どもたちのゲーム様相の変化について、⑤修正されたゲームでの取り組みについての項目を取り上げている。

附属長野中学校・教育実習 I（3 年次） 受講学生へのアンケート	
<p>これまでの教育実習の中で、実際の生徒たちの体育授業における実態について、実習生が事前に十分理解し届くことが難しいため、実習生が構想する教材の難度が生徒たちの実態を超えて高くなる傾向があるという反省、またそれと同時に、「初めての教育実習」で実習生が生徒たちに適合した教材を考へるところからスタートするのは実習の負担度が大きいのではないかとの考えを附属長野中学校の先生方と共有してきました。</p> <p>そのため、今年度の教育実習 I では、「球技」領域における既存の種目を生徒たちの学習能力や学習経験を踏まえて修正したゲーム（「アタック・プレッシャー」「ダブルセット・バレーボール」「ダブルバウンド・テニス」「ブレイク・ベースボール」）を単元教材として授業実践に取り組みでもらいました。</p> <p>○以下の質問に自由記述で答えて下さい。</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 特に、実習第 2 週目以降（8 月下旬から）の実際の授業づくりに向けてどのような準備ができましたか。 2. 教材（担当したゲーム）の開発経緯（なぜこのような教材を創ったか）や授業実践例についての書籍文献、ゲームのモデル的な映像、ゲームの実体験（事前に大学等でゲームを実際に試し、経験してみたこと）などは、単元の中での指導内容やその展開を考へる上で役立ちましたか。役立ったとしたら、どのような点で有効であったでしょうか。 3. 今回取り組んでもらった教材は、実習指導をされた先生方にとっても実際に附属中学校のカリキュラムの中で授業されているものがほとんどです。したがって、指導の先生方もよく熟知されているものでした。その意味で、先生方と単元の終末の子どもの姿（ゲームのできばえや学習活動の姿）を実習生と共有しながら授業づくりについてコミュニケーションができる可能性が高かったと考えられます。この点に関し、実習生の立場からはどうだったでしょうか。 4. 単元の中で、あなたの授業での働きかけを通して、生徒たちのゲームの様相が高まっていくことを感じられましたか。 5. 最後に、修正されたゲームによって単元の授業実践を試みたことについて、全体的な、あるいは個別具体的な感想を記述してみてください。

4. 研究成果

①教員養成カリキュラムにおける授業内容と教育実習の連関

調査対象とした 6 名の教育実習生の内、1 名の実習生による記述を例に挙げることにする。

実習生 D

教育実習では毎時間、個人の振り返り、グループの振り返り、ゲーム記録を書いていた。授業前にそれらの記録から課題などを読み取り、ある程度子どもの反応を予想して発言がしやすいような問いかけを考へて授業に臨んでいた。今回の模擬授業では前時までの記録がない状態だったので、反応が予測しにくかったように思う。実習中、子どもたちに色々書かせた記録にかなり頼っていた部分があったのを感じた。短い時間でいろいろ書くのも子どもたちは大変だろうし、私自身が子どもたちの姿から課題などを読み取る力をもっと高めたいと思った。

また、実習ではゲームが中心で、練習教材をほとんど提示しなかった。「子どもたちに考えさせる」ことで授業を進めていたが、授業の中で各チームが考へた練習方法を紹介する時間があればよかったと思った。子どもたちに考えさせるような授業を行うことができたのは、附属中だったからできた部分も多くあったと思う。今回の模擬授業では、練習教材を考へて提示したが、そのようなこともやっていく必要があると感じた。

実習生 D は、一つ目の視点として個人やグループの課題をクラス全体で共有するための方略について記述している。教育実習では子どもたちに記入させた授業の振り返りやゲーム記録に基づいて課題を把握していたが、単元の一部を切り取って行う模擬授業では、それができなかった。振り返りやゲーム記録から子どもたちの課題を読み取ることの大切さを認めつつも、子どもたちの活動の様子から教師が課題を見取る力を身につける必要性を認識したようである。なお、二つ目の視点としては、単元教材におけるゲームの出来栄を高める練習教材（下位教材）づくりの必要性について記述している。大学生を対象とした模擬授業を通して、中学生の技能的な実態を改めて思い起こすことで認識したことであろうと推察できる。

その他の 5 名についても考察を加えたところ、教授行為を洗練させていく視点、生徒の実態を想定した授業づくりの必要性、単元構成や単元展開の時間的思考にかかわる視点、単元教材としたネット型ゲームにおける戦術的課題に対する認識の深まりなどが記述されていた。そしてこれらは総じて、教育実習において実習生たちが認識した成果や課題が土台となって学び取ってくれた事柄であると考えられた。

教育実習で担当した球技領域における素材・教材を対象として、改めて模擬授業という場面でその授業づくりを試みることで、教材解釈やそれに基づく指導の在り方を洗練させていく視点が獲得されることを期待し、2019 年度に新たに取り入れた「素材・教材選択を視点とした教育実習と教科教育法の授業の連続的体験」の試みは、おおむね良好な成果が得られたものとして解釈できるのではないだろうか。

②教育実習で指導する素材・教材の選択

調査対象とした7名の教育実習生の内、1名の実習生による記述を例に挙げることにする。

①授業づくりの準備について

(A生) 学部のα先生からいただいた資料を参考に、実習生と話し合い、準備をした。また附属中の先生方から指導していただいたことを取り入れた。

②書籍文献・ゲーム映像・ゲームの実体験等について

(A生) 教材に取り組む際のつまずくポイントを把握することができた。また、指導する際にどのよう声をかけ、練習に取り組むように促すか学ぶことができた。『体育の教材を創る』『ボール運動の教材を創る』の本は授業づくりにおいて非常に参考になった。特に、授業の展開づくりで。

③指導教員とのコミュニケーションについて

(A生) 指導の先生方の意見や考えを私の授業に取り入れなかったら、うまく授業は進行せず、内容も一貫性のないものになっていたと考える。実習生と先生方は教材を熟知していたため、授業のゴールに向けた方向性を決めやすく、話しやすかった。

④子どもたちのゲーム様相の変化について

(A生) 強く感じた。私の授業では、強いアタックを打ち、得点すると決め、レシーブ、セット、アタックを段階的に練習した。授業を重ねるごとに各技術やチーム内の連携が高まっていると感じた。さらに、ゴールと定めた強いアタックを打ち、得点することができる生徒が増えた印象である。

⑤修正されたゲームでの取り組みについて

(A生) 生徒の気持ちになることをテーマに授業実践を試みた。どのような内容だとやる気を出すのか、また、なぜつまずきから抜け出せないかなど、多くのことを考えた。結果的に最後まで分からないこともあったが、生徒の気持ちになることで良い授業を創れたと思う。

実習生によるアンケート記述からは、2019年の教材選択を附属教員と学部教員とで合意したことのよさがそのまま評価されたと言えるのではなかろうか。まずは、第1に、2018年度の実習生による反省点になった「ゴール型」よりも「ネット型」中心に教材選択したことには予想通りのメリットが存在していたとあってよいであろう。特に、2018年から継続的に教育実習指導に当たられた教諭からはそのことが大いに指摘されている。学習場面での子どもの変化や向上を読み取りやすく、次の指導にその情報を生かしていけるところが「素材」領域の運動特性の違いに視点を当てた結果であろう。

第2に、「素材」からの教材づくりを実習生に課題化するのではなく、子どもの実態を配慮し、既に一定程度の授業成果が期待できることが確認されている既存の単元教材を実習対象にしたことのよさである。特に、その単元教材が学部教員によって構成されたものであり、なおかつ附属学校のカリキュラムに組み込まれているものであることが重要であろう。そのことによって実習生の単元構成－授業づくりの実際において子どもの実態との乖離を少なくするだけでなく、実習生－附属教員－学部教員が単元教材の選択の仕方を通して結びついていく可能性を大きく開き得るからである。

そして、第3に、学部教員が実習の事前指導を意味あるものにすることができることである。特に、学部教員が創出した具体的な教材選択を通して、実習生の単元構成や毎時の授業づくりの準備を促進させることができることが非常に重要であろう。実習生および指導教員の感想の中にこのことのよさに関する記述は如実に表れている。これは教育実習における附属学校と学部との連携強化の大きな一側面であると評価できるであろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 藤田育郎・岩田靖	4. 巻 14
2. 論文標題 保健体育科教員養成における附属学校と学部との連携・協同の試み：素材・教材選択を視点とした教育実習と教科教育法の授業の連続的体験	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 信州大学教育学部研究論集	6. 最初と最後の頁 322-330
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩田靖・藤田育郎	4. 巻 14
2. 論文標題 中学校保健体育の教育実習における授業の教材選択に関する実践的検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 信州大学教育学部研究論集	6. 最初と最後の頁 258-271
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤田育郎・岩田靖	4. 巻 18
2. 論文標題 保健体育科教育実習の充実に向けた取り組みの成果と課題：学部と附属学校の連携・協同の在り方	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 信州大学教育学部附属次世代型学び研究開発センター紀要	6. 最初と最後の頁 149-158
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩田靖・藤田育郎	4. 巻 18
2. 論文標題 中学校保健体育の教育実習における授業の教材選択に関する一考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 信州大学教育学部附属次世代型学び研究開発センター紀要	6. 最初と最後の頁 129-138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 有賀功太郎・岩田靖・中島政樹・駒村大祐	4. 巻 25
2. 論文標題 小学校における共同的な学びを生み出すゴール型の授業の探求 教材としてのゲームと結びつく学習過程の工夫を通して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 長野体育学研究	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤田育郎・原科郁希	4. 巻 25
2. 論文標題 インサイドキックの技能習得に向けた教材・教具の開発ー体育授業におけるサッカーの学習指導に向けた基礎的研究ー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 長野体育学研究	6. 最初と最後の頁 21-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森下 孟、谷塚 光典、東原 義訓	4. 巻 42
2. 論文標題 教育実習でのICT 活用授業実践によるICT 活用指導力への効果	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本教育工学会論文誌	6. 最初と最後の頁 105～114
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15077/jjet.42027	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩田靖・牧田有沙	4. 巻 24
2. 論文標題 体育授業における「指導言語」研究に関する系譜と展望	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 長野体育学研究	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤田育郎・岩田靖	4. 巻 16
2. 論文標題 体育授業における「指導ことば」に対する視点の育成：教科教育科目におけるeラーニング活用の効果	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 信州大学教育学部附属次世代型学び研究開発センター紀要教育実践研究	6. 最初と最後の頁 59-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 岩田靖・吉野聡・日野克博・藤田育郎	4. 発行年 2018年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 174
3. 書名 初等体育授業づくり入門	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	藤田 育郎 (Ikuro FUJITA) (90608027)	信州大学・学術研究院教育学系・准教授 (13601)	
研究分担者	谷塚 光典 (Mitsunori YATSUKA) (30323231)	信州大学・学術研究院教育学系・准教授 (13601)	